

よみがえる「里山」 生物5800種共生



フィールドワーク モビリティリゾートもてぎ

グリーンフォーラム（藤井康正座長）東京大学大学院工学系研究科教授は、ホンダが所有する「モビリティリゾートもてぎ」（栃木県茂木町）を視察するフィールドワークを実施した。同施設はモータースポーツだけでなく、大自然の中でアスレチックや多彩なアクティビティが楽しめる森の中のリゾート。モビリティと人と自然が共生するテーマパークとして1997年の開業以来、サーキットを取り囲む荒廃した里山を再生し、生物多様性を意識した森づくりが行われてきた。2023年には環境省の定める生物多様性の保全区域「自然共生サイト」として認定。東京都137個分の広大な敷地は、希少種を含む約5800種類の生物種が息する豊かな生態系が維持されている。

ホンダ 豊かな生態系維持

広大な敷地内に森再生

モビリティリゾートもてぎは、JRX宇都宮駅からクルマで1時間の距離、茨城県との県境に位置する。車中、市街地を抜けると車窓が農村から渓谷へと変わった。この先にモーターレースが開催される世界規模のサーキット場があるとは思えない。

深流沿いを走りゲートをつくると、モビリティリゾートもてぎだ。敷地内にはサーキット場のほかに、ホテルやキャンプ場、アスレチック施設、レストランなどが点在する。休日には家族連れで過ごす空間であり、レース開催日以外も来場者が絶えない。モビリティリゾートもてぎはホンダのグループ会社「ホンダモビリティランド」が運営する。F1で有名な鈴鹿サーキットも同社の運営だ。

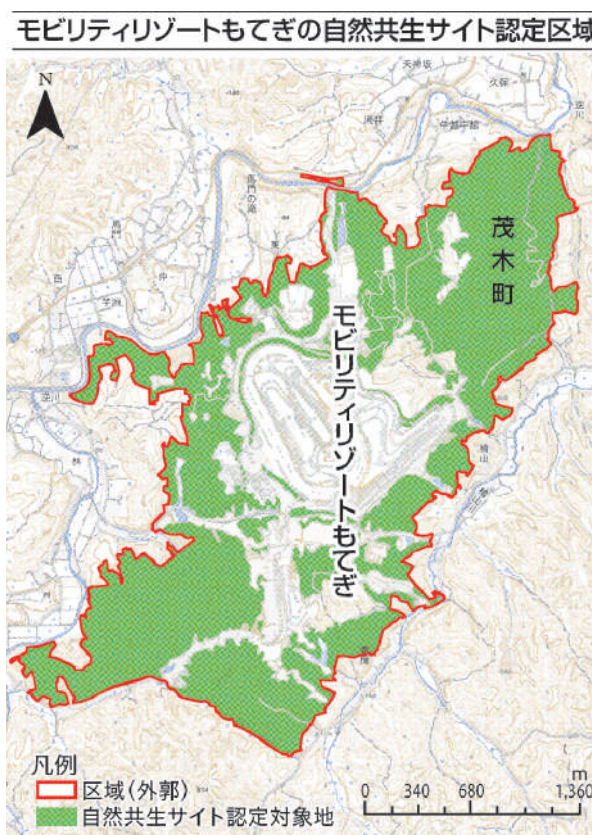


環境省の自然共生サイトに認定されたモビリティリゾートもてぎ

来場者が思い思いに楽しむ場所から坂道に入ると景色が一変し、すぐに山道になった。想像以上に急勾配だ。道は左右に折れながら続く。木を砕いたチップが敷かれており、ぬかるんだ地面に足を取られることはなかった。道の両脇には背の高い木があり、低い位置にも葉を茂らせた木々がある。太陽光がしっかりと地面まで届いている証拠だ。

下り終え境界が開けると棚田が広がっていた。ちよと収穫が終わっており、稲わらが干されていた。斜面に挟まれた風景は日本の田舎であり、そこが企業の敷地であることを忘れさせる。しかし、この棚田は稲作のためのものではない。生きものを保全させることが目的だ。

ホンダがサーキット場開発のために森を取得した当時は休耕田だった。生え放題だった草木を間引いて光が差し込むようにし、水を張って水田を復元させると生物が戻ってきた。



敷地面積は約640%。確認されている生物種は5800種にのぼる（出典：ホンダ）

ハッチョウトンボ 貴重な生息地



絶滅が危惧されるハッチョウトンボの保護も進む（提供：ホンダ）

小さな立て看板にカエル7種が生息していると紹介されている。日本一小さなトンボのハッチョウトンボも確認されている。他にも初夏はゲンジボタルやヘイケボタル、秋はオオカミキリ、冬には野鳥のキセキレイがやってくる。農業も化学肥料も使っていない証拠だ。

ホンダモビリティランドで、森のプロデュースとして指揮を振るう崎野隆一郎さんによると、伐採した木を炭にする時に排出される木酢液を農業代わりに使っているという。また、水田のそばには先が「丁字」になった木の棒が立っていた。古いウツツのようだが、これはオオタカを呼び込むために設置した止まり木だという。オオタカはコメを食べに来るスズメを撃退してくれる。「江戸時代の文庫を見て再現した」



適度な間伐によって森に光を取り込むことで草花の環境保全を図っている（秋咲きのアザミ）

（崎野さん）と前身のツインリンクもてぎが開業した1997年から「森の再生」が始まった。敷地は640%。東京ドームの137個分に相当する。取得当初は暗い森だった。放置された木々が密集し、地面に光が届かなくなっていたため、木を切って間引き、明るい森に変えた。



2000年に開業した自然体験施設「ハローウッズ」

森のプロデュースとして里山づくりや自然環境の維持・再生を担当するホンダモビリティランドの崎野隆一郎氏



環境省「自然共生サイト」認定



ハローウッズの森ではさまざまな表情の「木人（こびと）」が迎えてくれる

木で囲った大きな樽のようなものは「生命の塔」。アスレチックの遊具と思つたら、内部に落ち葉が積もっている。森の生物たちの命を育む隠れた家の観察設備であり、集まった虫や微生物によって分解され、落ち葉が減っていく様子が見られる。「哺乳類研究室」と呼ばれる小さな建物もある。壁に小さな穴があり、アカネズミが室内と外を自由に往来できるようになっている。また室内には、ニホンノウサギやホンダギツネの骨格標本も展示されている。どちらも森に生息しているという。

さらに山道を進み、開けた場所に出るとロープに下がつて滑走できるジップラインが整備されており、高い視点から森を観察できる。向こうの山を見通せるデッキもあり、条件が整った早朝は、雲海を見渡せるという。

芽が出ている切り株をいくつか見せてもらった。伐採後、残した切り株や根元から出た芽を育て、新たな樹林にする「萌芽更新」を森の再生に採用しているという。



④生え放題だった木々を伐採して沢を整備。個体数が減少した水生昆虫を増やす研究も行われている
⑤山道には草本類や低い位置にも葉を茂らせた木々があり、太陽光が地面まで届いている



ハローウッズの森には遊歩道が敷かれているため、森林浴と同時に自然散策を楽しめる



環境が企業価値向上のカギ

日刊工業新聞社が主宰する「グリーンフォーラム」は、産業界として地球環境保全に取り組むことを目的として1991年に設立された研究会です。有識者や行政関係者らの協力を得て、環境情報の収集・調査・研究、新聞やインターネットによる情報発信、環境事業の広報のサポートなどを展開しています。「環境が企業価値向上のカギ」を掲げて活動し、低炭素・循環型の経済社会システムの構築を目指しています。



